

## 極大粒の水稻品種「べこあおば」は 7年間平均で920kg/10aの超多収を記録

### 研究のねらい

地域の条件を活かした高生産性水田輪作体系の確立に資するため、寒冷地におけるえさ米、加工米を用途とした水稻の超多収を実証する。

### 成果の内容

- ① 「べこあおば」は、極多肥条件下（窒素量16～18kg/10a）において、7年間平均で粗玄米重920kg/10aの超多収を示す（図1）。寒冷地における従来の日本型超多収品種「ふくひびき」や温暖地におけるインド型超多収品種「タカナリ」と比べても安定して大きい粗玄米重を示す。
- ② 「べこあおば」の多収要因としては、「ふくひびき」や「タカナリ」と比べて、総粒数はやや少ないものの、粒が極めて大きいため、全体としての容器のサイズが大きいことが挙げられる（図2、表1）。

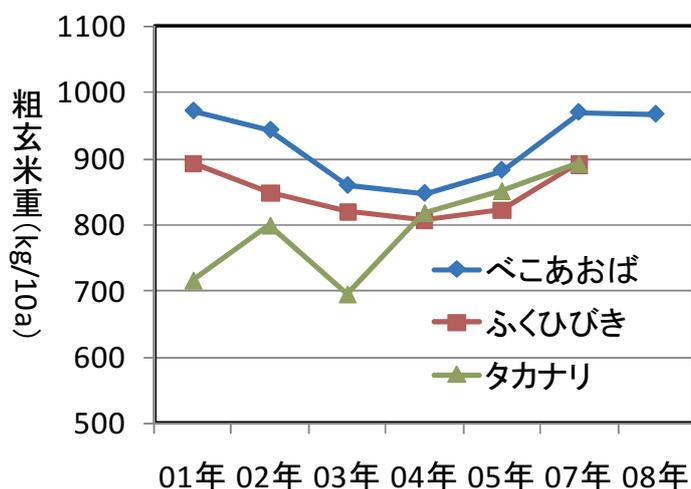


図2 ベこあおば(左)とひとめぼれ(右)の粒(上)と玄米(下)

表1 収量・収量構成要素の品種間差異

	1穂粒数	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	千粒重 (g)	総粒数 (/m <sup>2</sup> )	容器のサイズ (kg/10a)	粗玄米重 (kg/10a)
べこあおば	105	343	33.1	36218	1198	920
ふくひびき	112	367	23.9	40999	977	847
タカナリ	146	301	22.1	43845	969	795

窒素施肥量の合計は16～18kg/10aとした。容器のサイズ＝総粒数×1粒重。

### 成果の利活用

- ① 寒冷地において飼料用米や加工用米を栽培する際の品種情報として活用できる。

